
Dragon

ユメミツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dragon

【Nコード】

N6653N

【作者名】

ユメミツキ

【あらすじ】

国を護っていた男が、突然敵と見なされた。国を追われ、たどり着いた先は隣国の小さな田舎村。
そこで、自分が呪われた事を知った男は、その呪いを解くための旅に出る。

毎月の更新を目標にしています。

現在多忙のため、しばらく更新を停止させて頂きます。

落ち着きましたら、再開させて頂きたいと思ひます。
場合によっては、不定期にでも更新できれば……！

モノローグ

「ご無事ですか？」

差し出した手はゆっくりと降りた。

救ったはずの姫の目はいつぱいに開き、恐怖で満ちていた。姫は自分の横を怯えながら走り抜け、従者の後ろに隠れた。状況が掴めないまま立ち竦んだ。

二人の従者に剣を突き付けられた。

「お前は何者だ」

何を、今更。

「俺は、――」

切っ先に映る物に気付いた。

「――！？」

顔に浴びた返り血の中の、緑の虹彩の中の、少し膨らんだ、真っ黒な、確かに縦長の瞳。

少し前に倒した、化け物と同じ瞳。

「答えるっ！」

「俺はラウルだ」

「その目をさらして何を言っつ」

「だが、」

「あの方を騙るな魔物！！」

周りを見た。緊張、嫌悪、恐怖。あれ程強く濃厚な負の感情を受けたのは初めてだった。

姫と目が合った。

「ヒッ」

「貴様っ！！」

従者の一人が一步踏み出した。考える前に体が動いた。いつも通りに。

気付くと従者の右手は剣を握ったまま地面に落ちていた。

鮮やかな赤い血と、残った手で血を止めようとする従者を呆然と見つめた。

そこに隙を見たのか、もう一人の従者が斬り付けてきた。

反応が遅れ、急所からは辛うじてそらしたが脇腹を裂かれた。

液体が飛んだ。

暗く沈んだ、橙色の血が。

思わず固まった所へ突き出てきたのを危うくかわし、今度は相手を傷付けない様に剣を弾き飛ばした。

衝撃だった。

仲間が自分を敵と見なしている事が。

自分が躊躇無く仲間の命を奪える事が。

目の前で、剣を失った従者は手の無い同僚と姫を後ろに庇って自分を睨んでいた。

自分が今までいた場所はどこにも無かった。

どうしていいか分からなくて、そこに背を向けた。

橙色の液体と共に力が抜けるのを感じたが、それに構っている余裕は無かった。

ただひたすらに暗い方へ歩いた。

1

パァーン……

薄暗い森の中、突然の音に驚いた鳥達が一斉に飛び立った。

「よしっ行け！」

猟銃を肩に掛けながら男は犬の尻を叩く。犬は吠えながら駆け出した。

「あっおい待て、そっちじゃない！」

獲物とは全く別の方向へ向かった犬を追う。慣れてはいても、やはり木の根が這ったりと足場の悪い場所は走りにくい。ようやく犬が止まり追いついた頃、息はすっかり上がっていた。

「ハアツハアツ……勝手な所行くなって、何度も、言ってるだろ……」

男は膝に手を付いて呼吸を整える。いくらか落ち着き、顔を上げた。

「ん？」

犬が鼻先でつついている物に気付いた。茶髪の青年が右側を下にして俯せ気味に倒れている。辺りには、血の臭い。

「どうした？ 怪我してんのか？」

言いながら、青年を揺すった。しかし反応は無い。

「死んでんのかな？」

男は青年を仰向けに転がした。

まず目に入ったのは、顔の緑色の鱗。それから、橙色がこびりついた腹の傷口。

「竜人……！？」

男は大きく後退った。その時、青年が微かに身動きする。男は慌てて青年に駆け寄り、脈を取った。

「生きてる……」

少しためらった後、男は銃を体の前に回して青年を肩に担ぐ。
「帰るぞ」

犬に声を掛けて歩き出した。

2

まず目に入っただのは、梁が剥き出しになった見慣れない天井。首だけ動かして周りを見る。木の板を繋いだだけの粗末な壁に窓があった。

起き上がるうとして思わず呻き声を上げる。脇腹の痛みを堪えてなんとか上体を起こし、少し遠い窓から外を覗いた。木造の家の間で子供達が遊び、畑では大人達が農作業にいそしんでいる。平和な風景にしばらく見惚れた。

ぎいっとドアが軋み、入って来たのは水の入った桶と布を持った少女。目が合う。少女は乱暴に持っていた物を置いてばたばたとどこかへ走り去った。

その姿に、今更ながら目を押さえ俯く。

「おはようさん」

嗚れ声に顔を上げた。開けっぱなしのドアから老婆が杖を突いて入って来る。

「ずいぶん回復した様で何よりだ」

「ここは……」

目を隠したまま訊ねた。

老婆はベッドの隣にあった椅子に腰掛ける。

「この村はエルザスの国のルルド。お前さんの暴れた戦線からは遠い、辺鄙な村さね」

驚いて老婆を見た。

「ラウル・ランス。この国じゃあ、こんな田舎でもなきや誰でも知ってる名だよ。サンフィゼールの騎士団副長は、団長よりも恐ろしいってね」

着てたものを見れば分かるさ、と老婆は笑った。

「全快するまではこの村でゆっくり休みなさい。その間に今後の身の振り方をよく考えておく事だ。この村に残るもよし、国に帰るも

良し。お前さん位強ければどこか他の国に仕えるって選択肢もあるね。サンフィゼールにいたときも、引き抜きの話はあったんじゃないのかい？」

ラウルは視線を落とした。

「……どれも、出来ない」

「その目のせい？」

見せてみんさいと老婆はラウルの手をよける。緑色の鱗が目を囲むようにびっしりと生え、それより明るい色の虹彩の中に細く長い瞳があった。

「……姫はこれに恐怖し、その従者達は剣を持って俺を逐った」

言いながら、包帯の巻かれた脇腹に触れる。

「それが何だつて言うんだい」

老婆は眉を上げて言った。

「その程度で嫌がる器の小さい姫さんなんて気にしなさんな。サンフィゼールじゃどうか知らないけどね、こつちじゃ竜呪に掛かった人間なんて珍しくもないんだ」

それから、悪戯っぽく笑って付け足す。

「それに、お前さん良い男してるじゃないかい。姫さんに尽くした分ほかの女に貢がせたらどうだい？ なんならあたしが……」

「え……いや、遠慮する」

ラウルは老婆に握られっぱなしだった手を引つ込めた。本気で引いたのを見て、老婆はひよっひよっと笑う。

「冗談さね。生憎あたしにやそんな体力は無いよ。惜しいねえ……あと百若けりや放つとかないのに」

「はは……」

返す言葉が見付からず、ラウルは愛想笑いを浮かべた。

「婆っちゃん……相手、困ってんぞ」

見かねたように腕を組んで入って来たのは、灰色掛かった金髪を短く刈った、背は低めだがしっかりした体格の若い男。

「おお、ジャンか。ラウル、お前さんを見付けてここまで運んで来

「ただよ」

それを聞いてラウルはきちんと背筋を伸ばし、

「痛っ」

脇腹を押さえ、壁にもたれた。

「無理すんなよ」

ジャンはラウルの身体を支えて寝かせる。

「済まない……」

「いいって。あんた怪我人じゃねえか」

それからジャンは思い出した様に老婆を振り返った。

「婆っちゃん。会合やるから来いって」

「ああ。そろそろだと思ってたよ」

老婆はよっこらせと立ち上がる。

「そうだ。ジャン、ラウルは多分竜呪を知らないだろうから教えて

おあげ。お前さん、今暇だろう？」

「え？ 知らねえの？」

「……この目の事か？」

「ほらね」

老婆はジャンを見上げ、行ってくるよと杖を突いて部屋を出て行った。

「……竜呪を知らねえって事は、人竜も竜人も知らねえよな」

ラウルは頷く。

「竜呪ってのはな、簡単に言うと人間が竜になっちまう呪いだ。それに掛かると体の端から呪いに侵食されてって、最期には完全に竜と化す。竜呪に掛かった人間を竜人、」

「竜化したら人竜って訳か」

「そう」

ジャンは老婆の座っていた椅子に腰掛けた。

「人竜までいっちまうと、散々暴れまわった後に突然死ぬ。血が緑になったら危険信号だ」

「緑……。ああ、そう言えば奴の血は緑色だったな」

「奴って？」
「あなたに助けられる前に俺が斬った者だ」
「人間と同じ位の大きさの竜？」
「ああ」
「……そいつの血が目に入ったのか？」
「確か、そうだ」
「あちゃー、とジャンは額を押さえる。
「それで呪われちまったんだよあんたは」
「呪いを解く方法はあるのか？」
「……」
「無いのか」
「ラウルは視線をジャンから天井に移した。
「……そうか」
「そう言つて目を閉じる。
「あの、さ、その……あんま落ち込むなよ？」
「ラウルはジャンを見た。
「落ち込む？」
「あ、いや、そうじゃないなら良いんだが……」
「むしろ嬉しい、と言うことにしておいてくれ」
「……は？」
意味が分からずにジャンは聞き返す。
「死ぬ事が？」
「目的を得た事がだ」
「ラウルはジャンに体を向けた。
「俺が解呪法を見付ける。死ぬまでに、必ず」
「でも、」
「分かっている」
「反論しかけたジャンは、ラウルの表情を見て口を閉じる。
「それが難しい事も時間が無い事も、分かっている」
「だが、とラウルは続けた。」

「頼むから、奪わないでくれ」

「——分かった」

ジャンは小さく頷き、それから身を乗り出す。

「手伝ってやるよ。俺に出来ることなら何でも言ってくれ。何をしたら良い？」

言われてラウルはためらった。それを見たジャンは苦笑する。

「迷惑だったら遠慮なく言ってくれよ？」

「あ、いやそういう訳じゃ……」

グウー……

「……ない、から、何か食べ物をくれないか？」

赤面したラウルに笑いながらジャンは立ち上がった。

「美味くて消化に良さそうな物持ってきてやるよ。たくさん、たくさん」

最後は意地悪そうに言い、戸口に向かう。扉を開きながら振り返った。

「そついやあんた聞いた事ある名前だと思ったら、街で噂になっているサンフィゼールの悪鬼と同じ名前じゃねえか。あんたも災難だなあ」

ぱたんと戸が閉まる。

「悪鬼、か」

ジャンが出ていった後、ラウルは呟いた。

この国で剣を振るっていた自分はそう呼ばれて当然だ。
なのに自分はこの国の民に救われて。

ラウルはじつと宙を見つめた。

3

「お待たせ」

老婆は扉を開けた。中で机を囲んで座っていた六人が、一斉に振り向く。

「遅い」

警備頭のデイノが不機嫌そうに言った。威圧的な筋肉と、シャツの襟から覗く白い傷跡が目立つ。

「まあまあ。ご老体なんだから無理を言うでねえ」

そう取り成したのは、畑頭のケビン。長年よく日に焼けた肌には、深い皺が刻まれている。

「ほら老婆ちゃん、ここ空いてるよ」

手招きして、並みの男より逞しい女頭のポーラが老婆を呼んだ。

「ありがとさん」

老婆がポーラの隣の席に座り、杖を机に立て掛けた。それを見届けて、真っ白な髭を蓄えた村長が話を切り出す。

「今回集めたのは、ラウル・ランスの扱いについて皆の意見を訊こうと思つての。ぬし等、何か考えはあるか？」

「そんなの決まってるだろ」

棘のある声音でデイノが即答した。

「殺人鬼なんか村に置いておけるかよ。今すぐ追い出せ」

「医者として、私は賛成しかねます」

穏やかな顔つきの、細身な壮年の男が反論する。

「少なくとも怪我が完治するまで、私には認められません」

その主張に、ポーラがうんうんと頷いた。

「マシュー先生の言う通りだよ。殺人つたつて戦時の話じゃないか。怪我人を追い出す方がよっぽど鬼だね」

「終戦はしてねえ、停戦しただけだ。戦争はまだ続いているんだ」

サンフィゼールの卑怯なやり口は聞いたことがあるだろう、と言

つて、ディノは全員を見回した。

「奴がこの国を攻め取る作戦の一部だとしたらどうする」

「それ……言い掛かりでねえか？」

おずおずと発言したケビンを睨む。

「どういう意味だ」

ディノの剣呑な視線に縮こまりながらもケビンは続けた。

「だ、だってよ、お前が珍しく話し合いに積極的で、しかもこんなちっちゃい村で何をするって言うんだ？　ただあいつを追い出したいだけにしか思えねえ」

「そうさ。そもそも、ラウルの事はさつき村長から聞いただけじゃないの」

「だが、一理ある」

それまで黙っていた小柄な男が、ぼそりと呟いた。

「ラウル・ランスが、サンフィゼールの要人であることは確かだ」

「カルロ、あんたまで……」

「すぐに追い出せとは言わない」

ポーラの言葉を遮る様に、男は言った。

「様子見の時間があっても良いだろう」

「その間に事が起こったらどうする」

「お前さん、」

老婆が口を開いた。その目は真っ直ぐにディノを見据えている。

「ラウルが自分より強いかもしれないのが怖いんだろう？」

「なんだと！？」

ディノは机を叩いて立ち上がる。マシューとケビンは大きな音に身を竦めた。

「俺があんな奴に負けるわけねえだろうが！　しばらくぞクソババ！

」！

「ほらね、虚勢を張る」

見透す様な老婆の視線から逃れる様に、ディノは席を離れた。去り際、舌打ちしながら椅子を蹴飛ばす。

「どこへ行くのじゃ。話し合いはまだ終わつたらん」

「こんな無駄な会議やつてられつかよ」

村長にそう返し、デイノは乱暴に扉を閉めた。それを見ながら村長は、はあと溜め息を吐く。

「全く近頃の若いもんは……」

「可愛いもんじゃないかい」

お前さんも同じ事を言われてたよと、老婆は笑った。

「それで？ どうするんだい？」

村長はうむと頷く。

「カルロの言う通り、しばらくは様子を見よう。追放するしないはそれからじゃ」

解散を村長が宣言し、四人は席を立つて集会所を出た。

「デイノの言う通りだよ」

ぼつりと呟いた老婆を、家に帰ろうとしていた村長は振り返る。

「無駄な会議って事さ」

老婆は杖を突きながら、村長の脇を通り過ぎた。

「事が起こってラウルはこの村を出て行く。あたしの占いにや、そう出てるよ」

「事を何だと占ったのじゃ？」

村長の問いに老婆は立ち止まった。首だけを少し振り返らせる。

「それは分からないけどね、被害は甚大。そして不可避さね。でも、それがあたしらを救うのさ」

4

数日が過ぎた。

「これならそろそろ歩けるでしょう。立てますか？」

医者に促され、ラウルは渡された杖にすがってじわじわと立ち上がる。

「痛い……ですよね」

「大丈夫だ」

「無理しないでくださいよ？」

「怪我には慣れている」

言いながら、その場でゆっくり足踏みした。

ラウルは今、マシユーの家で暮らしている。ジャンに運び込まれて治療を受け、そのまま患者として居候しているのだ。

「歩ける様でしたら、少し風に当たってはとうですか？ 朝の空気は気持ちが良いですよ」

そうだなと返し、ラウルは杖を突いてまだ仄暗い外に出た。冷たい風が、寝起きのぼんやりとした頭を目覚めさせる。空は、夜から朝へ階調を成していた。

赤い方を見上げる。朝日は見えない。昇る陽を見るには村は余りに山に近すぎ、山は余りに高すぎた。その山の向こうにある筈の祖国を、ラウルは思い描く。

帰らなければ。

はつきりとした理由もなく、帰れるとも思わず、ただそう思った村のどこかで飼われている鶏が、大きな鳴き声を上げる。ラウルは近くの斜面になった草地に座り、次第に明るくなって行く空を眺めた。

人の気配に気付いて振り向いたのは、空が昼間の青さになった頃。少女が、片目でラウルをきつく睨んでいた。もう片方、右の目は眼帯だ。

「ご飯」

口の動きと合わせてやつと分かる程度の声量で簡潔にそう言い、伝わったかどうかは確認せず走り去る。

初めて会った時と同じ様に。

声を掛けようとして、止めた。

少女はマシューの家に住んでいて、治療や看護の手伝いをしている。父娘ではないが、マシューの言うことを良く聞く優秀な助手だ。勿論ラウルの事も看護している。

とても嫌そうに。

何をした覚えも無いのに、何故こうも嫌われたのか。

ラウルは軽く溜め息を吐いて立ち上がり、家へと向かった。

「ごちそうさま」

「あれ？ ティナ、もう良いんですか？」

頷いて、眼帯の少女は立ち上がった。

「山へ行くんだったら、ついでに薬草を探して来てくれると嬉しいのですが」

マシューはいくつか薬草の名前を挙げた。

「分かった。見付けたら採って来るね」

そう返して、ティナは持ち手の付いた籠を片手に外へ出掛けて行く。

「いつもはもう少し食べるんですけどね」

気を付けて、と声を掛けてティナを見送ってから、食器を片付け始めたマシューは呟いた。

「俺が気に食わないんだろうな」

食べ終えたラウルは、マシューに碗を渡しながら言った。

「ティナにはひどく嫌われている様だ」

何故だろう、とマシューを見上げる。マシューはその顔を静かに

見つめた。

「……ティナは、無闇に他人を嫌う事はしない子です」
穏やかに返して、食事の後片付けに戻る。

「直接、訊ねてみて下さい。教えても良いと思うなら、話してくれるでしょう」

「そうする」

ラウルは頷いた。

#5

朝食の後、ラウルは村の散策に出かけた。人が活動を始めた村には、人間が少ないなりに活気があり、幾人かは既に畑で作業をしている。

自分の国でも見たことのある風景だが、今まで見る余裕の無かった他国の日常が、ラウルには物珍しく思えた。

「あらあ、もしかしてラウルじゃないの？」

杖を突きながらのんびりと歩いていると、突然名前を呼ばれた。

振り返るとそこには、日除けの頬被りをした若い女が三人。ラウルが反応したことで、やっぱりそうよ、と互いにささやきあっている。歩ける様になったのね」

「怪我の具合はどう？」

「食欲はある？」

三人に囲まれ、畳み掛けられ、戸惑うラウル。

「え……そ、そうだな、マシユーのお陰で随分と良くなった」

話し声を聞いてか、側の家から他の村人たちも顔を覗かせた。

「あんたが噂の兄ちゃんか！ 元気になって良かったなあ」

「家へいらっしゃいよ。ご馳走するわ」

思わぬ歓迎にたじろぐラウル。初対面の相手に、こんなにも親しみを持って接せられるのは慣れていない。

何と返せば良いのかと対応に困っている所へ、見覚えのある男が現れた。

「お前等！ なーに怪我人にたかってんだよ！」

ラウルはジャンに後光を見た。朝日を背にして、短髪のが透けて光って見える。

「見るよ！ 困ってんだろ！」

なんだかこう、自分の対人能力の低さを露呈するようで情けない。ジャンの追い払う仕草に、洪々と村人達が家へと引っ込んでいっ

た。

「助かった、ありがとう」

今度はもつと愛想良くなるう、と思いながら礼を言う。

「こつちこそ、ごめんな。こんな所じゃ客もめつたに来ねえから、外の人間が珍しいんだ。気が向いたら、なんか話でもしてやれよ」

俺も聞きてえしとジャンは笑い、それからまだ立ち去っていなかった三人娘に向き直った。

「お前等も仕事あんだろ？」

三人はそれまでラウルに見せていた表情を苦くする。

「何よ」

「邪魔しないでくれる？」

「あんたに関係無いでしょ」

声の甘さも消え、もはや別人。

「ほら、怪我人なんだし疲れるだろ？ 話し相手なら俺が後でなつてやるから」

「自惚れんじゃないわよ」

「顔の良い男と話す方がずっと楽しいわ」

「あんたのニキビ面なんてご飯のおかずにもなりやしない」

ねえ、と三人が揃って愛想の良い顔をラウルに向ける。手品のようだ、と感心して見ていたラウルは、急に話を振られてとっさに返す事も出来ず。

「まさか……？」

「うわ、最低」

「気を付けてね！ 男はみんな狼よ！」

ラウルの返答を待たず、一方的な会話は続き、勝手に終わり、三人ははしゃいだ悲鳴を上げながら畑へと走って行った。

女性の会話とは、こうも展開が速いのか。ほとんど付いていけなかった。

少し落ち込むが、それ以上に落ち込んでいるらしい男が隣にいた。ラウルは沈みに沈んだジャンの肩をぽんと叩く。

「俺はお前の顔、結構好きだ」

「……この流れでそんな事言っちゃうんだ？」

気を取り直したジャンは、ラウルに村を案内した。

村人達が頻繁に声を掛けてくる中でラウルはいくらか慣れてきて、戸惑うばかりでなく、少しは歓談と言うものが出来るようになった。ジャンの仲介もあるが、それよりも、村人達の気の良さがその大きな要因だ。

「これで最後、会合所」

「こんな所で全員入るのか？」

ラウルの歩く速さに合わせて村を一周し、他の家とたいして変わらない質素な造りの小屋の前で立ち止まる。

「全員つて…… たった七人が入らない訳ねえじゃん」

「少ないな」

「まあ、村自体小せえからな。五十人位しか居ねえもん。それでも過去最大の人口なんだぜ」

婆っちゃんがそう言ってた、と付け足す。

「そう言えば、ラウルってサンフィゼール人だよな」

自らの出身を語った覚えは無く、「あの服の、太陽の紋章だよ」と補足されてようやく思い至った。

あの日は軍服を着ていた。当然、国章である朝日が意匠されている。

「あっちからエルザスにどうやって来たんだ？」

少し見上げるジャンにラウルは目線を合わせた。

「サネル洞窟を通つてだと思う」

ジャンの目が大きく開く。

「……あんた良く生きてたな」

サネル洞窟は、サンフィゼールとエルザスが挟むサネル山脈を貫

く天然のトンネルで、国境の警備も無く、それを通れば両国を行き来出来る。しかし出入国の制限が厳しい現在の情勢下においても、それを実行する者はほとんど無い。無数の枝分かれや微妙な歪みが、通る者をことごとく迷わせて来たからだ。両国がそれぞれ送った探検隊が遂に帰らなかった時から、警備兵はいなくなつた。

「どうやって正しい道が分かつたんだ？」

「分かつたというより、何となく気になる方に歩いてたら出口があったと言うか……」

「つまり、てきとーに歩いた？」

「まあ、そうなるな」

強運に呆れるジャンに、ラウルはふと浮かんだ問いを發した。

「今更なんだが、お前は仕事無かつたのか？」

「ああ。今日は猪狩りだから夜から……いや、待てよ……。あ！
当番忘れてた！！ やつべ、またカル口の親父に怒られる！！」

また今度なと残し、全力で駆けて行くジャンをラウルは呆然と見送る。その顔に、ふっと笑みがこぼれた。少しの寂しさを感じさせる微笑だつた。

6

村人達がラウルを見慣れ、見掛ける度に駆け寄って来るような事のなくなった頃には、ラウルは杖無しで歩けるようになっていた。走ったりといった激しい動きはまだぎこちないが、この穏やかな村ではそれ也不需要ない。

何もせず無駄に日々を過ごすのは余りにも勿体無いとの考えから、リハビリも兼ねて村人の手伝いをして暮らしている。その日は畑仕事を手伝っていた。

「今日はありがとなあ。女房がやるよりもはかどったよ」

首に掛けていた手拭いで汗を拭きつつ、白髪混じりの薄毛を風になびかせながら男が言った。

実際は慣れない手つきでの農作業は遅く、いつもならこの夫婦は夕食の準備も出来ている頃合いだろう。

「いや、ターリヤさんは流石だ。良い奥さんじゃないか」

この中年を少し越えた男は、カール。夫婦喧嘩をして妻が家を出て行ってしまったため、ラウルに手伝いを頼んだのだ。

行方を訊くと、隣の家だ、と言ったのには笑ってしまった。

「あんな強欲張りのどこが良いもんか！」

喧嘩の原因は、カールがこっそりと隠していた蜂蜜をターリヤが全部食べてしまった事。

蜂蜜は贅沢品だ。

どっちもどっちだと思うラウルは、はははと乾いた笑いでごまかした。

ジャンの話では、よくこんな喧嘩をしているらしい。ならば放っておいて大丈夫だろう、と判断したラウル。

「まあ、仲良くな」

言われたカールは、しかめっ面で手を振った。

ラウルは手を振り返し、夕焼けの中マシューの家へと歩く。

日の沈む方に山は無い。真っ赤な光が斜め前に伸ばした影が腰を叩くのを見ながら、今日の夕飯はなんだろうと考えた。

「ただいま」

扉を開けると、肉の焼ける良い匂い。

「お帰りなさい」

マシューは皿に料理を盛りながら、ラウルを迎えた。草と炒めた肉がこんがり狐色で、食欲を大いにそそる。だが、

「緑、……多くないか？」

「今日は、余るほど薬草が採れたんです」

マシューの家兼診療所の裏には、薬草畑がある。よく使うもので、栽培の簡単なものを育てているのだ。

「いや……それにしても」

肉は完全に埋もれている。火を通した状態でこれだ。材料を用意した時、何を考えていたのだろう。

「薬草炒めですから」

「……そうか」

何となく納得したラウルは戸口の瓶から桶で水をすくい、土で汚れた手と顔を洗った。

考えてみれば、元々薬草はよく食卓に並んでいた。いつもより量があるだけ。

「ところでラウルさん、ティナを見掛けませんでしたか？」

薬草炒めを盛り終えたマシューは、鍋へ大量の薬草を突っ込みながら訊ねる。

「まだ帰ってないのか？」

「はい……良かったら、ご飯ですよって呼んで来てくれませんか？
多分北の山にいますと思うんですけど」

特製薬草スープを作って待ってますから、とマシユー。

「分かった」

ラウルは頷いて、もう一度ドアを潜ろうとし、出際に思っていた
事をぶつけてみた。

「……薬草ってそれメインで食べないんじゃない？」

「好きなんです」

「……そうか」

再び何となく納得して、ラウルは家を出た。

「ティナー」

名前を呼びながら、藪をかき分ける。応える声はまだ聞こえて来ない。

自分には返事を返してくれないかもしれないと思い当たる。探しても意味は無いのではないかと。

だが、日は沈んだ。後は暗くなるばかり。獣の多い山に女の子一人――危険過ぎる。

人手は多いに超したことはないと言い切り、ラウルは更に声を大きくしてティナを捜した。

ティナは、徐々に暗くなる空を見上げた。そろそろ夜行性の動物が起き出して来る頃だ。

どうしようと思いつながら、急な斜面を恨めしげに見る。

その斜面の真ん中には貴重な薬草があった。それがあれば関節の痛みを和らげる塗り薬が作れる。

そこで最近膝が痛いところばすマシューの為に薬草を摘もうとし、転落。骨折はしなかったものの、足首は捻挫し、あちこちに打ち身が出来て。

じんじんする痛みとひどくなっていく腫れを感じながら、ティナは泣きたくなった。

微かに人の声が聞こえたのは、そんな時。

「助けて！」

ティナは必死に声を張り上げた。

誰かの声はだんだん近付いて来る。それが自分と呼ぶ声だと気付くと同時に、誰の声かも分かった。

そして、ティナはぴたりと口を閉ざす。
自分の名前が木霊するのを、息を潜めて聞いた。

微かな声が聞こえた気がして、ラウルは立ち止まりじつと耳を澄
ます。

風の音に混じって再びそれは聞こえた。確かな、人の声。

その声を頼りに、山を奥へ奥へと分け入る。

呼号、応答、呼号、呼号、呼号、呼号、呼号、呼号

いつしか探す声は聞こえなくなっていた。

ラウルは大まかな方角で搜索を続ける。

そして見付けた。採取した物を入れるティナの藤籠。籠はほぼ満
杯だった。

籠の向こうの地面は急な角度で下に傾いている。所々土が露出し
た部分がかなり滑り易そうだ。下を覗くと、少女の不機嫌な右目に
迎えられた。

「大丈夫か？」

ティナはふいつと目を逸らす。そして一言、
「放つという」

従う訳にもいかず、ラウルは斜面を滑り降りた。

見付かった。

あの、薄気味悪い目が自分を見下ろしている。他人の事を言える
様な物は持っていないけれど。

がさがさいう音と声が近いから、諦めてはいた。そうは言っても
不快なものは不快。

「大丈夫か？」

大丈夫だったらわざわざこんな所にじっと座ってる訳が無い。頭悪いんじゃないの？

っていうかもう、

「放つといて」

あんな奴に助けられたくない。顔も見たくない。声も聞きたくない。同じ空気を吸いたくない。

ティナがどんなに強く願っても、ラウルは降りて来た。

自分が取れなかった薬草を踏み躪って。

「軍人なんか大っ嫌いっ！！」

下に着くのとほとんど同時に、ティナが叫ぶ。その響きに生々しい感情を聞き取り、ラウルは立ち竦んだ。

「街も、人も、家族も！ 何でも好き勝手に壊して、結局何になったの！？」

ああ、そうか。

ラウルは目の前の少女が被害者であることを悟った。

「王様どうしのただの怨恨に何で私達が巻き込まれなきゃいけないの！？ 何であんた達はそんなに協力するの！？ ねえ何で！？」
理不尽への怒りは、余りにも正当。

「……王——国の、決定だ。仕方無かった」

「勝手な事言わないで！！」

加害者の苦しい言い訳は、ただ怒りを増幅させた。

「あんた達がしたのは仕方無かったなんて言葉で済まされる事！？ どうせ自分の頭で国に従うかどうか考えた事無いんでしょ！

自分達のした事全部人のせいに出て来て良いご身分だね、軍人って！
！」

返す言葉が見付からない。その言葉は、酷く正論に聞こえた。

ラウルはティナの真っ直ぐな眼差しに耐えられなくて、足元に視

線を落とす。急に、踏みつけている草の存在を感じる。

「……済まない」

「あんたが謝るの？ 悪いのは全部国なんでしょ？ こっちこそ悪かったね、濡れ衣なんか着せて！」

ティナは吐き捨てる様に言って、立ち上がろうとした。しかし捻挫した足には負担が大き過ぎ、当然の結果として再び座り込みそうになる。ラウルは手を貸そうとするが、

「触らないで！」

手を力一杯払い除け、ティナは再びラウルを睨み上げた。

薄暗い中で、少女の片目が白く浮き上がる。木の葉の風にざわめく音がやけに大きく聞こえた。

「おい」

沈黙を破ったのは、遠くから聞こえる呼び声。

「ティナーア」

「こつちー！」

ティナは声のする方へ一言叫んでから、危なっかしいながらも今度は立ち上がる。そして足を引いて歩いて行った。

ラウルは繁った木々の隙間から、いつの間にか星の出ていた空を仰ぐ。

その耳に意外と近い所からの会話が聞こえた。

おい、居たぞ

大丈夫か？

足、挫いた……

あー…… すぐえ腫れてんな

ほら、負ぶってやるよ

ありがと

草をかき分ける音と声が遠ざかる。

そっいやラウルは？
……知らない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6653n/>

Dragon

2011年4月18日23時25分発行